

SDGs意識・行動変容調査： 学習効果によるコンピテンシーの変化（その3）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学しあわせ研究所 公開日: 2023-08-21 キーワード: 作成者: 白鳥, 和彦, 薄羽, 美江 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000010

SDGs 意識・行動変容調査

～学習効果によるコンピテンシーの変化～（その3）

白鳥 和彦

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員
武蔵野大学 環境学研究科教授

薄羽 美江

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員
株式会社エムシープランニング 代表取締役

要約

ミレニアル世代やZ世代のSDGsの意識や行動の変化を調査した。令和3年、4年に続き、都内私立大学の学生を対象として、SDGsに関する5つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）評価および定性的な意見調査を、前期初めと後期末の2回行った。学習によりSDGsの学習力、情報力が向上していることはこの2年間と同様であった。また、行動力が変化していないことも同様の傾向であった。コロナ禍の影響が引き続き残っているためと思われる。環境経営系科目での学修が学生の意識を引き上げる傾向が明確となった一方で、経済的な側面や生活圏の制約などから、身近な事例には意識を持つものの地球環境や社会科題などへの関心に結びつかないことも見て取れる。学生の状況に即した事例から、SDGs、地球環境問題、社会課題などに繋げていく学修や実体験を通しての学修が効果的であることが再認識された。

1. はじめに

（1）背景

ミレニアル世代やZ世代のSDGsに対する認知度は高い一方、それら世代があらゆる環境・社会問題に意識的であると必ずしも言えない状況であるなか、これからの社会を担う若者世代がSDGsを知り、SDGsを意識した行動を取るために、学校での授業をはじめとして、教育機関の学習が果たす役割は大きい。

筆者（白鳥）は、2020年度、2021年度と、学生のSDGsへの関与度と意識・行動の変容について、都内私立大学（B大学）の学生を対象として行った。前期末/後期初めに1回目、後期末に2回目の調査を行い、この間における変化を比

較分析した。過去2年間の調査では、環境・社会問題に関する何らかの学習をすることにより、想像力、情報力、学習力が向上していた。また、行動力や達成力についてはあまり向上が見られなかった。この傾向はこれらの世代が共通する傾向であるのか、どのような教育機会や学習内容が意識向上や行動変容に有効なのか等について継続的に研究していく必要がある。

（2）本研究の目的

本研究では、学生のSDGsに関する意識・行動変容につながる要因を調査し、どのような学習や行動が効果的にSDGsに関する意識・行動変容を向上させていくかの検討に資することを狙いとしている。

環境やSDGsに関する学習が多いと、SDGsの意識や行動レベルが高くなることが想定出来ることから、属性や学習効果によりSDGsに関する意識・行動変容の差異を見出すことを狙いとする。

この変容の差異や若者世代の傾向について、継続的に行うことが必要であると考え、環境・社会問題に関する学習効果について3回目の調査分析を行った。今年度は、他の属性との比較や、学生の意見（後述する定性アンケート）に焦点を当て分析を行うこととした。

2. 研究の方法

昨年、一昨年に続き都内私立大学経営系学部の学生（以下B大学という）を対象¹として下記の方法をとった。

- ① オンラインによる「SDGsサーベイ」²を利用し、上期講義の初めおよび下期最後の講義時の2回実施し、その間の意識や行動の変化について比較。
- ② 上記サーベイ結果の分析を補足するために、サーベイ回答後に、学生自身が意識や行動の変化をどのように認識したか等について定性的なアンケートを実施。

（1）定性アンケートについて

「SDGsサーベイ」を行った後に表示される5つのコンピテンシー（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）のレベルに対し、高い点数が出たコンピテン

シーに対する自分なりの意見、低い点数が出たそれらに対する自分なりの意見、さらに、「こんな学習があれば、こんな体験があれば、SDGs の意識が高くなりそうだと思うこと」について、自由記述にて調査した。定性アンケートの収集は同大学の LMS で回収した³。

（2）調査対象および実施時期

B 大学で経営系の学部で「環境経営」に関する講義を 2022 年度に受講した 2～4 年生を対象とした。カリキュラム上では環境系の講義は少ない。「SDGs サーベイ」および定性アンケートは、昨年度と同様な方法とし、1 回目を 2022 年 4 月下旬（一部は遅れての回答あり）、2 回目を 2022 年 12 月に行った。サーベイの実施にあたっては、学生に対し「SDGs サーベイ」の URL および入力方法を伝え、各自が自由時間にサーベイへの回答を行った。サーベイへの回答では、個人が公開されることのないように注意しつつ、1 回目と 2 回目の回答、および定性アンケートの回答が関連付けられるような調査回収を行った。

3. 調査結果

（1）調査回答数

「SDGs サーベイ」については JEI のシステムより、対象学生の回答データ（50 問の素点）を抽出した⁴。1 回目の有効回答数は 214 件、2 回目は 198 件であった。定性アンケートは、前期後期 2 回の調査結果の比較が出来る回答として、172 件の回答が得られた。

（2）サーベイ結果分析

JEI のシステムより抽出した第 1 回目、第 2 回目の回答データより、5 つのコンピテンシーレベルについて、回答者全体の平均ポイントを算出した。図 3.1 に示す。また、比較のため、昨年度一昨年度の平均ポイント図を併記する（図 3.2）。

過去 2 年間の調査と比較して同様に、1 回目より 2 回目のコンピテンシーが向上している。「SDGs サーベイ」では、知らない、わからないという回答を中心に、行動できていないという回答は、環境負荷を与え続けるものとしてマイナス回答が掲出される設計となっている。環境経営系の授業を受けて、その後に全体

的にレーダーチャートの5つのコンピテンシーが伸長を見せているのは、それまでの知らなかったことを知ることができている結果であろう。

一方で、3年間とも行動力の低さが顕著に示されている。特に2022年度の行動力の伸長が低かった。

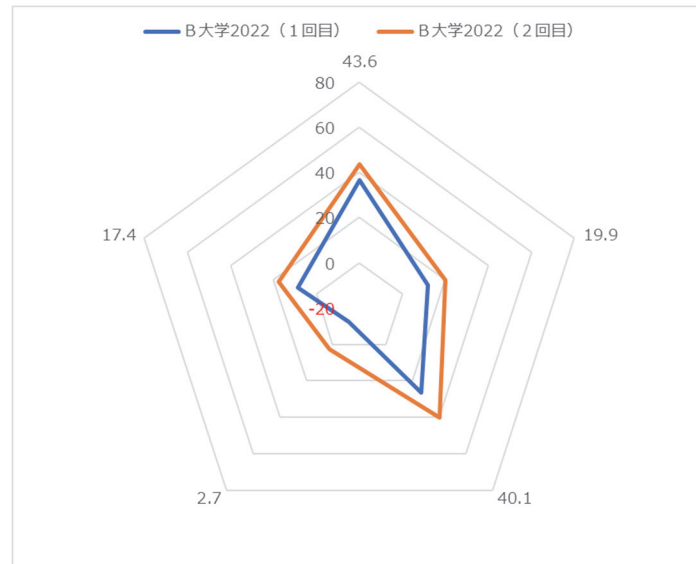
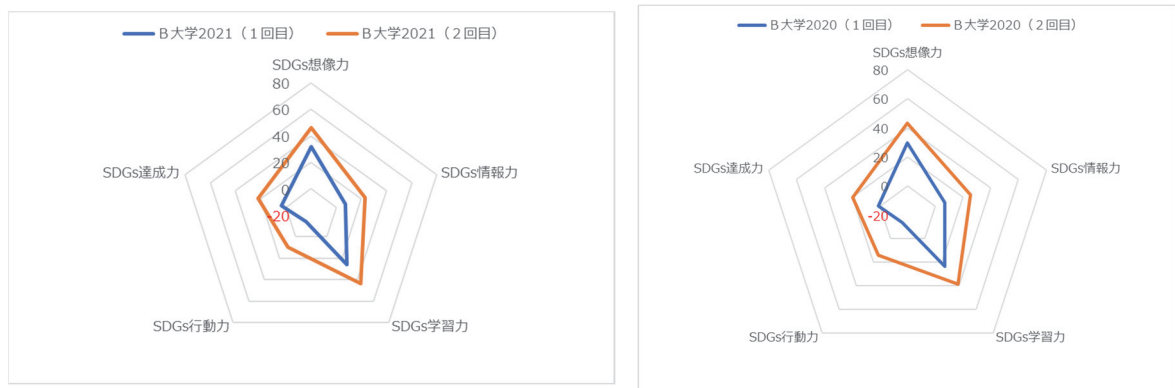


図 3.1 B 大学のコンピテンシーレベル（1回目、2回目の比較）



a) 2021 年度
 1回目 275 人、2回目 168 人
 b) 2020 年調査
 1回目 168 人、2回目 127 人

図 3.2 B 大学コンピテンシーレベル 過去年度の比較

「SDGs サーベイ」50 問の設問毎の平均ポイントについて、1 回目と 2 回目それぞれのポイントおよびその差を図 3.3 に示す。この図の横軸は「SDGs サーベイ」50 問の設問となっている。

図 3.3 に相当する過年度データは、ここでは図示しないが、3 年間で傾向には変化がない。

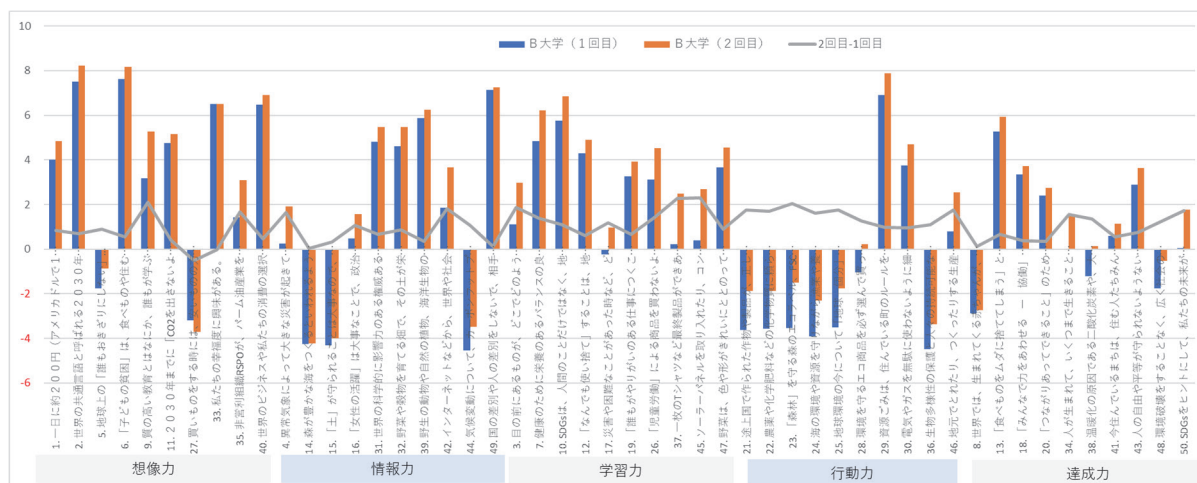


図 3.3 サーベイ回答ポイント（1回目と2回目の比較）

想像力、情報力、学習力では概ね得点が高いが、「森が豊かな海をつくるといわれるように「水」を守ることは大事なので、川や湖や海を汚すことがないか、山や森がどのように守られているか、地域の人たちと調べることがある。」「土」が守られることは大事なので、どのような種がどのような畑でどのように育てられ、どのような作物が私たちの毎日の食事の栄養になっているか、日本や外国のことを調べることがある。」との設問においては得点が低い。

行動力、達成力は全般に低い得点であり、「途上国で作られた作物や製品が、正しく取引されていると認められているフェアトレードのマークがついている商品があれば、必ず選んで買う。」「農薬や化学肥料などの化学物質に頼らない、自然界の力で生産されたと認められている有機 JAS マークがついている農産物、加工食品、飼料、畜産物があれば、必ず選んで買う。」「森林」を守る森のエコラベル、FSC マークがついている紙や鉛筆、文房具や家具があれば、必ず選んで買う。」「海の環境や資源を守りながら漁業や養殖の持続可能な環境を配慮し

た MSC や ASC マークがついている魚、加工品があれば、必ず選んで買う。」。
「地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。」との設問に対しては2回目、すなわちある程度の学修をしたのちでも得点が低い状況となっている。

（3）定性アンケート結果

定性アンケート（自由意見）から、コンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）が高い項目、または低い項目に対する理由（学生自身の意見）、今後の意識や行動向上に向けた方策を分析した。分析にあたっては、回答数が二百以上と十分な回答があることから、テキストマイニングを用い⁵、要因やキーワードを把握した。なお、テキストマイニングにあたっては、学生の記述した文言のなかで、以下の分析に不要でかつ出現頻度の高い言葉（「SDGs について・・・」、「・・・と思う」など）を削除している。

代表的なマイニング結果を図 3.4～図 3.8 に示す。これらは昨年度と同様な単語の出現が見られた。また代表的な意見を列記する（ は筆者加筆）

■ 名詞 - ■ 動詞

名詞・動詞	スコア	出現頻度
からだ - 思う	0.77	5
知識 - 得る	3.00	3
機会 - 増える	2.00	3
授業 - 学ぶ	0.92	3
環境経営論 - 学ぶ	0.92	3
想像 - できる	0.52	3
環境 - 考える	0.29	3
点数 - 出る	2.00	2
責任 - 気づく	2.00	2
ニュース - 見る	1.50	2
問題 - いける (否: 100.00%)	1.50	2 (否: 2)
身 - つく	1.20	2
知識 - 知る	0.86	2
幸せ - 感じる	0.50	2
行動 - できる	0.26	2

図 3.4 想像力が高い理由について定性意見 係り受け解析

<想像力が高い理由についての代表的意見>

- ・この1年間で社会的な問題や環境問題について学ぶ機会が増え、それについて考え、意見を持つことが増えた。
- ・ニュースやインターネットでSDGsや世界の状況を調べて、自分には何ができるのか考えることが多い。
- ・何をしたら温暖化が軽減できるか、苦しんでいる児童を救うことができるのかというようなことについて考えることができている。
- ・様々な内容を学んだため、視野がひろがった。何故、このようなマークを付けるようになったか、何故このような問題解決に取り組んでいるかなどを知った。
- ・授業を通して環境について学んだことで、「未来の世界がこうなったらいいのに」と想像できるようになったと考える。学んで環境問題についての状況を知った。
- ・自分の中で環境のために何か出来ることはないかと考えることがあるから。

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
環境経営論 - 授業	0.77	4
授業 - 学習	0.39	3
講義 - 受講	1.50	2
環境経営論 - 講義	0.40	2
大学 - 講義	0.40	2
環境経営 - 講義	0.40	2
授業 - 就職活動	1.00	1
授業 - 履修	1.00	1
授業 - 先生	1.00	1
授業 - ゼミ	1.00	1
授業 - 紹介	1.00	1
授業 - テーマ	1.00	1
講義 - おかげ	1.00	1
学習 - 高さ	1.00	1
環境経営論 - ゼミ	1.00	1

図 3.5 学習力が高い理由について定性意見 係り受け解析

<学習力が高い理由についての代表的意見>

- ・講義で学ぶ機会がたくさんあり、自分でも買い物をする際に考えることが多々ある。
- ・SDGs を目にすることが多いし、授業でも触れたことから学習力が高くなっていると考える。
- ・授業やニュースで問題を知った時に、なぜそれが起こっているのかを考えることを意識しているし、それが自然とできるようになってきた。
- ・地球で起こっている問題を講義で知ってさらに自分で調べたりしていた。
- ・深くはないが知ろうとする、学ぼうとする力はあると考えるから。
- ・授業の学習だけでなくリアクションペーパーなどで授業とは別に調べる機会があったため、SDGs 学習力が高くなった。

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
行動 - 移せる (否: 13.33%)	15.00	15 (否: 2)
行動 - 移す	9.75	12
商品 - 買う	4.20	6
行動 - 思う	0.84	6
行動 - 起こす	3.00	3
マーク - つく	1.33	3
環境 - 考える	0.29	3
原因 - 考える	0.29	3
個人 - できる	0.26	3
理由 - 思う	0.24	3
行動 - 繋がる	2.00	2
記事 - 読む	2.00	2
身 - 着ける	2.00	2
行動 - とる	1.50	2
頭 - わかる	1.20	2

図 3.6 行動力が低い理由について定性意見 係り受け解析

<行動力が低い理由についての代表的意見>

- ・取り組みのある商品を購入したり、自身の貯金を自由に使える財力がまだ無いから行動に移せていない。
- ・環境について行動することができるのは大企業など資金に余裕のある企業だけであり、人でもお金に余裕のある人しか環境について考えることのできる人がいないのではないか。

- ・行動していることはゴミの分別など簡単なことだけであり、環境ラベルがついている商品購入やそれに伴う知識がない。
- ・マイバッグやマイボトルを持ち歩いたり、通学に公共交通機関よりも徒歩や自転車を選択するというように、小さな行動はしています。しかし更にレベルの高い行動がとれているかどうかを問う質問が多かった。
- ・想像することは出来ても、いざ行動するといったときにその方法の知識不足で行動に移せていない。
- ・世界で起こっている問題の深刻さをわかっていない。
- ・知っていてもなかなかその商品に値段的な問題で手を出せなかったり、ひとつの行動をするときに、SDGs のことが頭にないことが多く、まだ染み付いていない。
- ・行動を起こすところまで行くのは、ハードルが高いと感じます。
- ・金銭的な問題から、どうしても値段が安い商品を選んでしまう傾向がある。
- ・友達や周りの人と積極的に SDGs について議論などを行うことが殆どない。
- ・ネットショッピングの際だと、これは環境問題に対して努めている商品だとすぐわかるのでそのような商品を購入することができるが、実際に外で買い物する際は自分で商品の裏面などを見るという作業が必要。
- ・興味があっても実際に何をしたらいいのか分からなかったり、自分だけが何か行動したところで変化が起こるのかなど考えてしまい、どこか他人事のように感じてしまっているからだと思う。
- ・環境ラベルを理由に商品を購入するということはまだ少なく、たまたま欲しかった商品に環境ラベルが付いていたり、機能や価格に差がなかった時などは選ぶようにしているが、最初にラベルを意識して購入することはほとんどない
- ・私よりも母が買い物をすることのほうが多いので、意識もしないし考えることがないから、家族で環境マークの意味の共有とかを行うことができればいいのではないか。
- ・食べ残しはしない、ゴミの分別をするなどの簡単なことはしている。しかし、資金を寄付したり、ボランティアに参加したりすることはなかった。
- ・講義で学び、知識は最低限ついたと思うが、それを実際に自身の生活で行動に移すまでのハードルが高いからだと感じた。頭ではわかっているけど、実際に行動できなかつたため、今後は積極的に行動に移したい。

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
行動 - 移せる (否: 66.67%)	3.00	3 (否: 2)
行動 - 移す	2.40	3
からだ - 思う	0.60	3
行動 - 伴う	2.00	2
商品 - 買う	1.00	2
食材 - 買う	1.00	2
行動 - うつせる	1.00	1
行動 - 始める	1.00	1
ニュース - 取り上げる	1.00	1
話題 - 出る	1.00	1
きっかけ - 作る (否: 100.00%)	1.00	1 (否: 1)
知識 - つける	1.00	1
商品 - 選ぶ	1.00	1
授業 - 学ぶ	1.00	1
授業 - 受ける	1.00	1

図 3.7 達成力が低い理由について定性意見 係り受け解析

<達成力が低い理由についての代表的意見>

- SDGs に関しては国や企業規模の話であるという意識がどこかにあって自身のことには置き換えられていない。
- 家族や友人と会話の中で SDGs の話をする機会がない。自分から話すきっかけを作れていない。
- 知識はあっても、いざ自分が行動や発信をするのは難しいと感じる。
- 問題意識は持つことができるが、私が行動したところで世界に対して影響はないと感じる。
- SDGs に関して考えることはあるが、実行は全くしていない。
- 学習力や想像力が高くても、実行に移すことができていない。
- エシカルな消費に関してはそもそもあまりモノを買わないので環境ラベルなどを見ることも少なく、実行できるタイミングが少ない。

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
環境 - 配慮	6.22	7
商品 - 購入	3.82	6
中学校 - 高校	4.00	4
イベント - 参加	1.18	4
ボランティア - 参加	1.18	4
世界 - 現状	0.91	4
学習 - 機会	0.44	4
行動 - 学習	0.43	4
生活 - 体験	0.39	4
小学校 - 中学校	1.71	3
イベント - 開催	1.50	3
体験 - 学習	0.26	3
イベント - 企画	2.00	2
商品 - ラベル	1.50	2
一般的 - 販売	1.50	2

図 3.8 コンピテンシーを高めるための方法についての意見に対するテキストマイニング 係り受け解析（名詞一名詞）

<コンピテンシー向上に向けての特徴的な意見>

- ・実際に私たちが貧困の人々を救うためにはどのような施策を行うべきか考え、実践するプロジェクトなどがあれば、知識が深まるだけでなく今後の行動を変える一歩になると思う。
- ・国際交流プログラムや、国際協力プロジェクト、国際会議など、様々な教育プログラムを通じて、学生たちが異なる文化や地域の人々と協力して、世界中の課題を解決するためのアイデアを提案する機会を学校が積極的に導入していくことが大切だと思う。そうすることで、学生たちが国際的な視野を持つことができる。
- ・環境に良い商品を選ぶことや環境問題を意識することによってどれだけの効果があるのか目に見えてわかりやすく体感することができたらよい。
- ・大学生にでもできる取り組みを学べる機会。世界が直面している環境問題などは知っていても、あまりにも自分の生活とのスケールが違いすぎて、「私なんかには何もできることはない」とってしまう。
- ・教育環境が整っていない地域の状況をリモートで繋いで、現状を把握することで、先進国に住む私たちがどれだけ不自由なく生活できているのかを実感できるのではないかと。

- ・自らが直接現地へ赴き、向き合うべき課題を目の当たりにすることでより環境に対する配慮や責任感をもつ。
- ・自分の行動がどの環境へ影響しているのか、SDGs への対策はできているか可視化する。スマホアプリなどで、身近なもので自分が地球環境の改善にどれだけ貢献したか可視化できるようにし、ポイントをつけるなど、個人個人が環境について気軽に貢献し SDGs への意識も高くなっていく。
- ・SDGs の取り組みに貢献できているという実感を体感する。
- ・自分の目で見えて、変化を感じられるような体験ができるとより良いと思う。
- ・近隣住民との関わりを増やす。地域の人と環境保護について話し合う。一地域、小さい範囲においても取り組みが必要である。
- ・学校以外で SDGs について触れる機会が少ないので、体験学習のような機会がもっとたくさんあるまたは周知する機会がもっとたくさんあれば意識が高くなるのでは無いか。
- ・お金をあまり持っていない大学生でもできる SDGs の活動。例えば、安価かつ、どのような商品を選択すれば環境に対してよい影響をおよぼすか。
- ・普段の生活の中で SDGs というものに触れる回数を多くするべき。

4. 考察

（1）他の属性における SDGs 意識調査との比較

筆者（薄羽）は、本研究と同様な SDGs 意識に関する調査研究を、高校生を対象に行っており（薄羽 2022）、その結果との比較を試みる。

比較対象となる属性は、国内において文科省・環境省が推進している ESD（Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育）プログラムにおいて、「高校生国際 ESD シンポジウム」を主催している T 高校（坂戸市）で、2019 年より「SDGs サーベイ」を用いて継続的に調査をしている。

2021 年度に行った調査は図 4.1 のようであった。

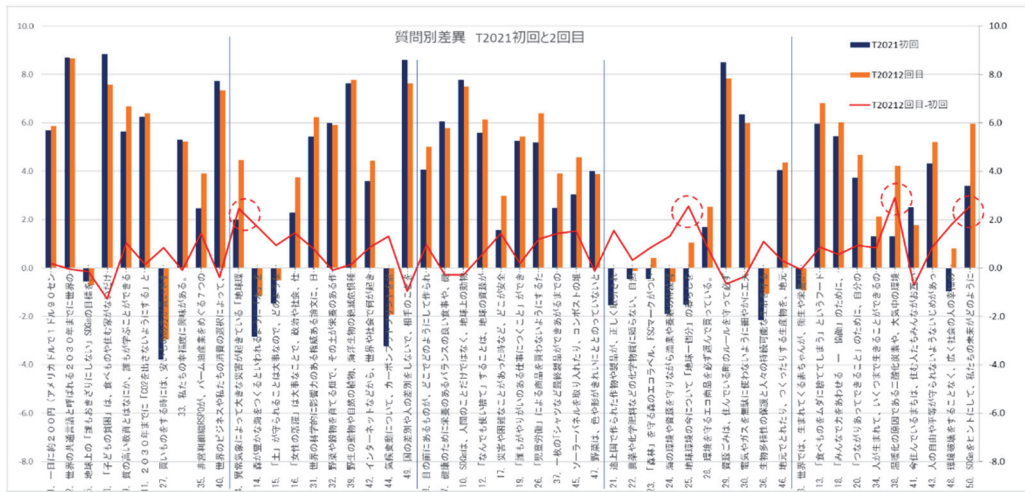


図 4.1 T 高校における SDGs サーベイ回答ポイント

T 高校の 2 回目の調査では、「異常気象によって大きな災害が起きている」「地球環境の危機的状況」について、世界の情報を知っている。」（情報力）、「地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。」（行動力）、「温暖化の原因である二酸化炭素や、大気中の環境汚染の原因となる二酸化硫黄の排出のことなど、世界規模のつながりあいを話し合うことができる。」（達成力）などの設問ポイントが時に伸びている。「子どもの貧困」は、食べものや住む家がないだけでなく、親が貧しいと子どもが教育を受けることができないという目に見えにくい問題なので、社会全体で解決しなくてはならない問題だ。」（想像力）、「国の差別や人の差別をしないで、相手のことをもっと知りたいと思う。」（情報力）、「資源ごみは、住んでいる町のルールを守って必ず分別して、しっかりきっちり出している。」（行動力）は 2 回目の調査でも高いポイントであるが

やや下がっている。

B 大学の結果を、これと比べると、情報力の 2 設問、行動力が低い傾向と同様である。

また、T 高校における 2019 年度の調査で、「SDGs サーベイ」後に自己診断を通じたアンケートからは、「行動が乏しい・認証商品マークの意味を知らない。学習を活かせていない。つまり、実行への知識が欠如。経験を積む。」「勉強はしていても行動につながっていない。クレジットカードを持っていないから寄付ができないが、それ以上の自分ができることを考えていなかった。」「良いことの想像力はあるのに行動ができていない。人から与えられたらできるが、自分からは取りに行っていない。」「行動力が低い。知っていてもやらない。お金を使うことには非積極的。想像や学習をしていても達成力には結びついていない。」といった意見があった。これらは、本研究で B 大学生が回答している達成度が低いことへの自己分析において定性アンケート回答に寄せられているコメントと近似している。

（2）定性アンケートからの考察

「SDGs サーベイ」1 回目から 2 回目に得点がアップすることについて、定性アンケートの結果を分析すると、次のようなことが言える。

① 得点が高いコンピテンシーにおいて高い回答になった理由の推察

第一段階として、学生自らが情報を獲得している（テレビやニュース、授業を通じて）という実感コメントが想像力・情報力の高得点を支えている。

第二段階として、情報の「多さ」だけではなく、そこから関心を持ち、真因を考える「深さ」とグローバルアジェンダに向かう「広さ」に及んでいるという自己認識回答が高得点へのトリガーとなっている。

第三段階として、自らの内に閉じることなくとどまることなく、他者との連携、対話、情報伝達、行動など、自らの外への働きかけや環境配慮の実践を自己認識できているレベルに達している。

② 得点が低いコンピテンシーにおいて、なぜ低い回答になったかという理由の推察

第一段階として、日頃から自分から調べて情報を得ようという意識がなく情報が不足、または偏りがある

第二段階として、学んで得られた知識を自分ごととして理解ができていない。

どこか遠い他人事のように感じている。

第三段階として、知っても時間的理由や経済的理由から行動に移せていないし、情報を知っているだけで人に伝えるなどということがなかった。

以上のことを踏まえ、SDGs に対する意識・行動をさらに向上させるためには、

- ・実際に行動してみること、体験することから情報を得ること、自ら情報を取りに行くこと
- ・現地・現実・現状に触れることから認識をするリアリティを実際のボランティア活動などから得られること
- ・教育の重要性、初等教育から SDGs を身近にするような学習機会の必要性といったことが必要であることが読み取れる。

T 高校の得点変化は、テーマやプログラム設定によって、着実に意識と行動変容が得られている事例とも言える。インドネシアフィールドワーク、コロナ禍中においてはオンラインによる海外コミュニケーションなどを経験しており、現地・現物・現状把握を通じた実感を得ている。

SDGs 学習については、文科省の学習指導要領においては、3年前に小学校に導入され、その後に中学、昨年 2022 年度に公民のカリキュラムに高校への導入がアクションラーニングを通じて活発に行われている。現大学生は、この点、SDGs 情報を大学授業で学び知識として得ることはできても、その活用や社会的影響においては自分自身の存在意義と結実させることにおいては未然と予測できる。定性アンケートに回答されているコメントのプラス原因には、知らなかったことを知ることができて世界観の広がりや現実的なリアリティの獲得がトリガーとなっており、一方、マイナスにとどまる原因には、情報を自らとの乖離として、授業にとどまっているためであろう。

5. まとめ・今後に向けて

以上のように、3年間に亘り同大学・学部の学生を対象に、「環境経営」に関する講義を受講することによる意識・行動の変容を、「SDGs サーベイ」および直接の定性アンケートを用いて調査してきた。5つのコンピテンシーにおいて、講義受講前に比べ受講後はそれぞれ向上しているものの、情報力や学習力は高

く、行動力や達成力は低いままであった。3年間同様な傾向であった。一連の研究期間はコロナ禍で学生は自ら行動することが制限されていたこともひとつの要因であろうが、行動力や達成力の得点が低いのは、多くの学生の傾向であると思われる。本研究から得られたことを要約すると、

- ・与えられた情報のみで自分が自ら関心を持って調べることができないことにより授業のための SDGs 理解となり、自分自身の中で一過性のものとなっている。

- ・頭でわかっているにもかかわらず金銭的に猶予可能な範囲の制限からもエシカル消費は高くつく意識が働き、安いものを選ぶことが必然となり、より良いはずのエシカル行動選択の上では実際にできていないことが多い。

- ・世界の状況を知ることがないので、狭まっている自分の身の回りの環境のことで世界観が閉じてしまっているため、SDGs は学習しても自分ごとにならずに遠くのことのように感じて行動に移せていない。

といったことが明らかになった。

意識・行動変容に向けては、身近なリアリティがあること、社会参画などの用意により今後の行動変容が期待されることと考えられる。

SDGs 17 のゴール達成は 2030 年アジェンダとされているが、2030 年を通過点としてその先に継続されなくてはならないものである。それは今回対象として回答した学生たちの人生そのもの環境変化、社会情勢、世界経済等に直結するものとなる。その実感をどのように得ることができうるか、5 つのコンピテンシーを向上するためには、実践そのものを通じた個人の「ありたい姿」としての幸福感や達成感の醸成をはかる教育が、社会責任のひとつとして問われていくこととなる。

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の憲章全文の最初の部分には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とある。この「築かなければならない」心の中の平和を尋ね、そのための自らの幸福を探究することの教育と、本 SDGs 教育がともにあることの、未来開発について能力開発が行われる HDI（人間開発指数）と SDGs の連携なども今後の課題として見つめていきたい。

謝辞

本論文は 2022 年度しあわせ研究費（研究テーマ：SDGs 意識・行動変容調査研究）の助成を受けたものです。

本研究を進めるにあたり、「SDGs サーベイ」およびアンケートに協力頂いた学生諸君に感謝申し上げます。

注釈

- ¹ 対象となる学生は、同一属性（同大学・学部）であるが、同一学生ではない。
- ² 「SDGs サーベイ」は、一般社団法人日本エシカル推進協議会（以下 JEI という）のエシカル教育ワーキンググループが開発したプログラムである。SDGs に関する 5 つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）を評価するひとつのツールである。概要および設問は白鳥（2020）を参照。
- ³ 定性アンケートの回答内容については、個人情報や個人的な表記も含まれるため、集計した結果および代表的意見のみ本論文で掲載する。
- ⁴ 一般に公開されているサーベイでは 50 問それぞれの回答内容は得られない。
- ⁵ テキストマイニングは、ユーザーローカル社の AI テキストマイニング（Web 版）を使用した。

参考文献

- 薄羽美江（2021）「エシカル教育推進ワーキンググループオンライン自己診断ツール JEI SDGs Survey 実施調査 2018-2020 報告」2021 年 2 月。
（ <https://www.jeijc.org/ethical-summit-week/> 2022 年 3 月 8 日アクセス）
- 薄羽美江（2022）「JEI SDGs Survey -持続可能な開発目標の評価と EX -エシカル・トランスフォーメーション・考-」『産業と教育』No.831, pp.14-19
- 加渡いづみ・薄羽美江(2020)「SDGs 学習の視点から考える持続可能な能力開発のステップ：キャリアデザインのためのコンピテンシーの開発」『消費者教育』40, pp.47-57。
- 白鳥和彦（2021）「SDGs 意識・行動変容調査―（その 1）学習効果によるコンピテンシーの変化―」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 4 号, pp.58-74
- 白鳥和彦（2022）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシ

ーの変化ー（その2）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第5号, pp.123-137
日本エシカル推進協議会(2017)「JEI SDGs online Survey」。

(<https://www.jeijc.org/topics/jei-sdgs-online-survey/> 最終アクセス 2023年3月
30日)